

ロジニケーション・ジャパンカップ

ディベートガイド

I. 中高生の多くが取り組む「ディベート」とは

- ① ある与えられた論題（テーマ）に対して、
- ② 肯定（賛成）側と否定（反対）側に機械的に分かれ、
- ③ 発言時間が限られた各自のスピーチにより、
- ④ 説得力を競う団体競技のこと。

- × 自分の好きなテーマで話したり、自分の主義主張を述べたりする弁論大会
- × 相手の発言に野次を入れたり、反論で遮ったりするテレビ討論会
- × パワーポイントやグラフ、映像を使って説明するような、プレゼンテーション

2. 当大会の試合におけるポジションについて

- ① あらかじめチーム全体で用意した立論を読み上げる「立論」
- ② 相手の立論に対して質問し、立論の分かりにくい点を明らかにしていく「質疑」
- ③ 相手からの質問に対して、立論の内容に基づいて分かりやすく説明する「応答」
- ④ 相手の立論に対して、自分の言葉や資料を用いて反論する「はんぱく反駁」
- ⑤ 相手の反論に対して、自分の言葉や資料を用いて再反論する「再反駁」
- ⑥ 試合全体をまとめ、自分たちの主張がどういう点で相手より上回っているかを述べる「最終反駁」

→各選手のスピーチの順番・役割・時間は決められており、質問に応答する時間帯以外は、1人の選手が話している最中に、他の選手が発言することはできない。
→ジャッジを説得する競技であるため、質疑応答の時も正面を向いてやりとりする

3. 当大会の試合時間（約 35 分）

①肯定側立論	3 分	
②否定側立論	3 分	準備時間 2 分
③否定側質疑（肯定側応答）	2 問	
④肯定側質疑（否定側応答）	2 問	準備時間 1.5 分
⑤否定側反駁	2 分	準備時間 1.5 分
⑥肯定側反駁	2 分	準備時間 1.5 分
⑦肯定側再反駁	2 分	準備時間 1.5 分
⑧否定側再反駁	2 分	準備時間 1.5 分
⑨否定側最終反駁	2 分	準備時間 1.5 分
⑩肯定側最終反駁	2 分	

4. 立論担当者の役割

立論は、様々な証拠資料を用いて議論を組み立てる必要があり、チーム全体での綿密な事前調査が求められるため、アドリブで発言することはない

→原稿を間違えず、滑舌よく、時には審判も見て、メモがとりやすいように読み上げることが求められるポジション

5. 立論の構成例

論題（テーマ）：今回のディベートで議論する内容を表す。

- ・「日本は鉄道の運賃を自由化すべきである。是か非か」

<肯定側>

ラベル：論題（テーマ）を肯定すると、どういうメリット（良い点）があるかを短い言葉で説明する

- ・「鉄道路線の維持」

内因性：プランを探っていないために発生している問題があることを説明する。

- ・鉄道企業は、社会環境の変化により非常に厳しい状況に陥っている。
- ・都市部の在来線や新幹線だけでなく、地方部の在来線も持っているような鉄道会社は、都市部の在来線や新幹線の黒字により地方部の在来線の赤字を補う「内部補助」を行ってきたが、非常に困難になってきた。
- ・しかし、上場している会社にとって、3年の赤字見通しを立てることが必要な現制度では値上げが困難である。

- そのため、このままでは大幅な廃線に踏み切るしかない。

解決性：プランを採用すればその問題は解決できることを説明する。

- プランにより、鉄道企業は運賃の値上げによって収入を増やせる。
- その結果、赤字路線は内部補助によって維持できる。

重要性：その問題がとても深刻であり、解決が求められていることを説明する。

・鉄道は生徒や高齢者など、自家用車を利用できない住民にとっては必要不可欠な移動手段であり、廃線は深刻な影響をもたらす。よって、鉄道の廃線を防ぎ、多くの住民の移動手段を維持できるこのメリットは大変重要である。

<否定側>

ラベル：論題（テーマ）を肯定するとどういうデメリット（悪い点）が起きるかを短い言葉で説明する

- 「貧困層の鉄道利用からの排除」

固有性：プランを採用しなければ発生しない問題であるということを説明する。

- 運転できない人や通勤・通学などで特定の鉄道路線に乗車するしかない人が存在する。
- 値段にかかわらず利用せざるを得ない場合がある鉄道の運賃は、需要減少率と価格上昇率の比である価格弾力性が1を大幅に下回る。
- こうした特徴を持つ鉄道の運賃は、公益性を保つために国の認可制となっており、不当な値上げを防げている。

発生過程：プランの採用によって新しい問題がどのようにして起こるのかということを説明する。

- ・プランを導入すると、私企業である鉄道会社は、収入を増やすために適正な水準を超えた値上げを行ってしまう。
- ・実際、現在の制度が施行される前は、短期間で値上げが繰り返されていた。

深刻性：その問題は論題を否定するほどの深刻なものであるということを説明する。

- ・鉄道運賃が大幅に値上がりした場合、移動をあきらめたり減らしたりする人が多数生まれてしまう。
- ・通学定期券が値上がりすると、家計の厳しい家庭の生徒は遠方の学校に通えなくなる。
- ・通勤定期券が値上がりすると、交通費が自己負担となっている非正規労働者に大きなダメージを与える。

6. 質疑担当者の役割

質疑は、相手の立論に質問するポジション

→どこに質問しているのかの「サインポスティング」をしっかり行う

→時間の管理権は質疑側にあるが、相手に悪意が見えない限り、答えは基本的にさえぎらずに聞くべき

① 相手の立論について、わからなかった点や疑問点を確認する

例 1) 内因性 1 に質問します。コロナ禍も収まってきた現在でも、鉄道会社は赤字のまま

なのですか？

→審判や聴衆の代わりに質問するようなイメージ

② 相手の弱点をジャッジにアピールし、次の反論につなげる

例 2) 解決性に質問します。運賃を値上げした場合、客離れが起きることが考えられますが、それでも期待するような収入を得られるのですか？

→反駁担当者ときちんと連携して、反駁につながるような質疑を心がける

7. 応答担当者の役割

応答は、立論担当者が行い、立論に対する相手からの質問に答えるポジション

→相手の質問をはぐらかすことなく、誠実に答えればよい

→自分たちの議論を小さくしてしまうような受け答えや、立論内容と異なった応答は厳禁

→チームとしての正しい受け答えができるような、想定応答の用意が不可欠

例 1) たとえ黒字に回復していたとしても、今後も確保し続けられる見通しはありません。

例 2) よほど法外な値上げでない限り、需要は減っても収入総額は増加すると示しています。

8. 反駁・再反駁担当者の役割

反駁は相手の立論に対して、再反駁は相手からの反駁に対して反論していくポジション

→どこに反駁・再反駁しているのかのサインポスティング、反論内容、証拠資料、まとめの順で行う

→証拠資料を読む時には、内容が聞き取れるようにわかりやすく読むことが重要

→使用した資料によって、自分たちは何を主張したいのかをジャッジに伝わるように努める

→相手のシナリオに沿いつつ、自分たちに有利な結論を導く「ターンアラウンド」ができないかも検討する

→相手が再反駁するのに手間取るような、効果的な反駁を一つでも多くしておくことが必要

→再反駁のパートで新たな反駁をすることはできない

<否定側反駁>

例) 解決性に反駁します。肯定側は運賃の値上げによって収入が増加すると述べていましたが、実際は値上げを嫌って利用しなくなる客離れが起きるため、期待するような収入は得られません。(証拠資料の引用) よって、解決性はありません。

<肯定側反駁>

例) 発生過程に反駁します。プランを導入すると、私企業である鉄道会社は、収入を増やすために適正な水準を超えた値上げを行うとありました。現在の鉄道会社は公共交通機関を営むという社会的責任を負う意識が高まっており、地域住民からの反発を避けるために大幅な値上げは行いません。(証拠資料の引用) よって、不当な値上げによって多くの利用者が鉄道に乗れなくなる事態は発生しません。

<否定側再反駁>

例) 発生過程に再反駁します。プランを導入しても、公共交通機関を営むという社会的責任を負う鉄道会社は地域住民からの反発を避けるため、大幅な値上げは行わないで多くの利用者が鉄道に乗れなくなる事態は発生しないとありました。肯定側の資料はあくまでも一企

業の見解に過ぎず、一般的に当てはまる不当な値上げの発生理由と実際に度重なる値上げが繰り返し発生したという事実は否定されていません。

<肯定側再反駁>

例) 解決性に再反駁します。否定側は値上げを嫌って利用しなくなる客離れが起きることにより、期待するような収入は得られないため解決性がないと反駁していましたが、通勤客を中心はどうしても鉄道を利用しなくてはならない利用客は確実に存在するため、よほど法外な値上げでない限り、需要は減っても収入総額は増加することを御確認ください。

9. 最終反駁担当者の役割

最終反駁は、試合をまとめつつ、自分たちの議論が相手よりどう上回っているかを主張していくポジション

→立論に沿って、反駁の流れがどうなっていたかの議論全体の確認をする

→相手の反駁がなかった点を念押しし、反駁がぶつかり合った点について、こちらの方が上回っている説明をしっかりしておかなくてはならない

→明らかに負けている点は諦めて触れないという判断も必要で、反駁が見落とした点について追加で反駁する「遅すぎる反論」や、立論で述べていない「新しい議論」を持ち出すのはルール違反

◎ 最も重要な役割は、ジャッジに対し投票基準の明示をすること

→自分たちの議論の中で一番効果的なものをジャッジに意識させ、この試合で重視すべき観点（国家としての役割・影響を及ぼす規模・発生確率など）及びその理由、そしてその観点に

照らして自分たちが勝っているということを、論理立てて述べなくてはならない
→投票基準の明示がなされないと、ジャッジが自分の価値観に照らし合わせて判断してしまうことになり、試合を制御できなくなるので、確実に自分達に投票してもらえるような基準を打ち立てることが求められる

<否定側最終反駁>

自分たちの議論をまとめ、肯定側の立論と比較して否定側の優位性をジャッジに主張することが求められる

→肯定側最終反駁を封じ込めるような先手を打っておくことも求められる

例) プランにより、運賃の値上げは確実に実施されるため、多くの貧困者の鉄道利用が困難になるデメリットは確実に発生します。これに対し、肯定側は運賃の値上げによって、廃線が維持できるだけの収入を確保できると証明できていないため、解決性が評価できません。よって、多くの住民の移動手段を維持できるという重要性も実現されません。以上より、住民の生活を不当に侵害するだけのプランの社会的意義は認められないため、否定側に投票してください。

<肯定側最終反駁>

自分たちの議論をまとめ、否定側の立論と比較して肯定側の優位性をジャッジに主張することが求められる

→試合における最終パートであるので、ジャッジに訴えかけるようなスピーチを行いたいところ

例) 現在でも貧困に陥っている社会的弱者は多く存在しており、プラン導入が直接的な原因となって鉄道が利用できなくなる人がどの程度いるのか、否定側は示せていません。これに対し、

肯定側は運賃の値上げによる增收によって内部補助の維持が可能となり、廃線を防止して鉄道を必要とする利用者の生活を維持できることを示せています。以上より、規模があいまいなデメリットよりも、多くの住民の移動手段を維持できる確実性を評価し、肯定側に投票してください。

I 0. フローシートとは

議論の流れを記録していくメモ用紙のことを、フローシートと呼ぶ

→パートごとに何が話されたかメモを取り、そこからの議論の発展や質疑の様子などを記録していく

→発言中に考えることはせず、速記者のようにただメモを取ることに専念するとよい

→記号などを使用して無駄な時間を取りたくない工夫もしておきたい

II. 判定の基本

① 試合の中で出された議論やそれに対する反論を聞いて、肯定側の主張するようなメリットが本当に生じるのか、その可能性はどのくらいの確率か、起こるとしてどのくらい大きなものと考えられるのかを評価する。

$$\text{【メリットの評価】} = \text{【内因性】} \times \text{【重要性】} \times \text{【解決性】} \cdot$$

→簡単に言えば【メリットが起きたときの大きさ】×【起きる確率】

② 試合の中で出された議論やそれに対する反論を聞いて、否定側の主張するようなデメリットが本当に生じるのか、その可能性はどのくらいの確率か、起こるとしてどのくらい大きなものと考えられるのかを評価する。

【デメリットの評価】 = 【固有性】 × 【深刻性】 × 【発生過程】

→簡単に言えば【デメリットが起きたときの大きさ】 × 【起きる確率】

- ③ メリットの合計とデメリットの合計の比較を行い、主に最終反駁で出される両チームの比較・総括スピーチを参考にして議論を比較検討してどちらに投票するかを決定する。

I 2. 反論内容の評価

- ① 一方のチームが根拠を伴って主張した点について、相手チームが受け入れた場合、あるいは反論を行わなかった場合、根拠の確からしさをもとに審判がその主張を採るかどうかを判断する。

→反論のなかった部分については、基本的には同意されたものと見なすが、そもそも当初から立証責任が果たされていなかったと考えられるものについては、反論がない場合でも却下して構わない。ただし、その際は選手に「なぜダメだったのか」を納得させられるような理由が必要であり、求める立証責任の基準は両チームに対して公平でなくてはならない。

- ② 一方のチームの主張に対して相手チームから反論があった場合には、審判は両者の根拠を比較してどちらの主張を採るかを決定する。

I 3. 判定説明

- ① 個々の論点などの判断

両チームの主張が対立した論点については、一方の主張を採用した理由（あるいはどちらの主張も採用しなかった理由）を、それぞれの発言を引用しながら具体的に説明する。審判の判断で採用しなかった主張については、採用しなかった理由を具体的に説明する。

- ② 個々のメリットやデメリットについての判断

メリットについては内因性・解決性・重要性、デメリットについては固有性・発生過程・深刻性のそれぞれについて、どのように判断したのかを具体的に説明する。

③ 全体の判断

メリットの全体とデメリットの全体のどちらが大きいと判断したかの理由を、具体的に述べる。最終反駁などで比較の議論が出ていた場合には、その議論にも触れて説明する。特に、比較の議論とは逆の判断をした場合には、なぜ逆の判断をしたのかを丁寧に説明する。

以上

執筆者：NPO 法人口ジニケーション・ジャパン理事長

開成中高弁論部監督

神尾雄一郎